
三千京の桜

よいやま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三千京の桜

【Zコード】

N71610

【作者名】

よこやま

【あらすじ】

三千京と言つ町で暮らす、聰司と沙織。二人は待ち合わせてよく一人でいる……。

第一章 月夜の紅葉

1

佳久屋敷町^{かく やしきちょう}と書つ町が在る、私はそこに一十六年住み続けている。佳久屋敷町と名のつく町だが、世間的には三千境と呼ばれて知られている。かつて町には三千本の桜の木が在ったそうだ。そして都会の喧騒からは離れているために、誰かが当てはまりもしないのに「秘境」と呼びいつの間にか三千境と呼ばれるようになった。しかし今は桜の木はほとんど切り倒されている、この町にも人家が多くなり始めているからだ。ほとんどは木造家屋であり、洋風の家屋はほとんど見受けられない。私の家は代々続いたお茶屋で在り、私は跡取りである。大学を卒業して以来私は父親の言いつけにより、武道を極めている。そこに何の意味と価値があるのか私には分からぬ、ただ父も祖父も同じようにしてきたと言つので、私は断ることが出来なかつた。

今の季節は秋である、まだ紅葉は見かけないが、確かに肌に感じる空氣の温度だけは変化し続け、時々雨が降ると炬燵が恋しくなる。最近は観光客も増えている、しかしあまり歓迎は出来ない、この町に来る人間は私達をこの町の一部だと感じ、私達人間をある種の娯楽の一部だと認識している。町を歩けば度々質問を受けることが在る、たとえばこの町の歴史について、この町で一番美味くて古い料亭はどこかなど。だが私は町の歴史など私は興味が無い、誰がこんな京都でも無い田舎町の歴史に興味を持つだろうか、古い寺は在るけれど、ありがたい仏像も無ければ、良いお説教をしてくれる坊主が居るわけでも無い。一つを除いて。確かに美味しい料亭は在るが、その店は今では常連しか入ることが許されない店になつてゐる、も

ちろん私は入ることが出来るが私は気に入ってはいない。私は私の父親がその店の板前と仲が良く、私はおまけとして入ることが出来た、だから女将と主人は私を私の父親の息子と言つことで店に入れているわけだ、私はそれが気に食わない。

そのような町についての質問をしてくる人間に對して私は一つの言葉で切り捨てるようになつた。

「私の父親に訊いてください、あそこ茶屋ですよ」

その言葉の御蔭なのか、私の父親の茶屋でお茶の葉を貰つて行く客が増えたようだ。私は特に気にしたことは無いが、ある日母親がそんなことを言つていたのを私は聞いた。

朝早く目を覚まし、まだ朝靄の中に在る町の一部を眺める。着物に着替え、いつも私より早く起きて朝飯の仕込みをしている母親に会う、母はいつも一杯の飯と漬物と味噌汁を出してくれる。私はそれを朝飯とし、もう寒い秋の空の下へと降りる。時々息が白くなる日もあり、私はその日をいつも待ち望んでいた。私はいつも剣道場には一番最初に来る。太陽は上がりついて、少しずつだが気温を上げていて、朝靄も消えかけている。そういう日はどこか心が休まる気がしていた。

三千境には柔道、剣道、弓道、合氣道を極めた師範が四人居て、私は今は剣道を習つている。その剣道の師範は私の次に道場にやつてくる。

「やあ、やはり今日も君が先か、私ももつと早起きせねばならないな」と宮部師範は言つ。

「私にはこれくらいしか、師範にかなうものが在りません」と私は言つた。

「いや、君はまだまだ成長の見込みが在る、秋だけしか剣道をしないのはもつたといないぞ」

「私の父が許しません」

剣道場の鍵は宮部師範が持つてゐる。その鍵を使い師範は扉を開

け中に入り私はその後に続く、道場の中は冷氣に満ちていて私の肌を刺す。

「君は先に行つてなさい、私が相手をする」と師範は言い、荷物を部屋に置きに行つた。

私は剣道儀に着替える、道場の中は一層冷たい、窓から入つくる朝の光によつて私の白い息が露わになる。

竹刀を脇に置き正坐をしている私は、この時間も勿体ないと思ひ素振りを始めた。

道場内に竹刀が空を切る音が響いている。私は一心不乱に竹刀を振つた。

しばらくすると師範が現れた。私は防具を装着し道場の真ん中に立つた。師範も同じように防具を装着し、私の前に立つた。

「さて、君は昨日より強くなつたかな」と師範は言つ。

師範は上段の構えだ。師範はまだ私を見ているようだ。

私は何度も胴を狙つたが、ことごとく失敗した。私はどうしても胴ばかりを狙つてしまつ、時々小手を狙うが、それも無理だつた。やはりこの人には勝てないとthoughtした瞬間に面を打たれた。

師範は面を外し、「君は今私に心負けしたな」と言つた。

私も面を外し「なぜ判つたのですか?」と私は質問をした。

「君は一瞬私には敵わないと思つただろう? その気持ちが竹刀にも出ていた」

私はその後ずっと稽古を続けた。ここでの道場が賑わうのは午後三時過ぎからだ、その時間までは私と師範、それに師範の娘の夏華と親友の磯崎潤一郎の四人だけしか道場内には居ないことになる。磯崎潤一郎はこの町で一番古い旅館の跡取りで在り、彼の父親は私の父親とも仲が良く、私の家の茶を彼の旅館で使つてくれている。そして潤一郎も私と同じように武術を極めると言いつけられていた、それは私の父親の影響だった。

師範の娘さんが拵えた握り飯を昼食とし、私と潤一郎は試合をす

ることになった。

「手加減しないよ」と潤一郎は言つ。

「臨むところだ」と私は言つた。

彼の実力は私より下だ、彼は去年の秋から剣道を始めたばかりだつた、私は大学を卒業した年の秋から剣道を始めていた、それだけでも実力の差は出るものだ。だがしかし、時々彼の力が私を超える瞬間が在る、彼は一瞬の隙を突くのが抜群に上手く、彼の目は鋭く一瞬の動きも見逃さない。

私は小手を決められた。私の不覚である。

潤一郎は日に日に強くなつていて、成長の早さは私をはるかに超えている。この分ではこの秋の内にでも追い越されてしまうかもしない。

「僕の勝ちだな」と面を外して潤一郎は言つ。

「君は恐ろしいくらいに強くなりそうだな」と私は言つ。

「いや、今の試合は貴様が手加減したからさ」

「僕は手加減などしていない、手加減などしたら君に失礼だろ」

「しかし、僕の目には手加減しているように見えたな

「なぜ?」

「貴様は右手の力を抜いただろ? 僕にはお見通しさ

「君の目は鷹の目か?」

三時を過ぎると袴を着た小学生達が集まつてくる、私と潤一郎は彼らと一緒に稽古を続ける。中には私に匹敵するほどの身長を持つ中学生も居て、私は彼に勝つたことが無い、何しろ彼は小学生の時からこの道場に通つていて、学校でも剣道部に所属し、三年時の最後の試合の頃には県内で一番目に強くなっていた。

「僕も彼には敵わないよ」と潤一郎も言つている。「当たり前だけどな」

「君には素質がある」と私は言つた。「まだまだ強くなるだろう」

「でも、僕は剣道をやっていても結局は旅館の主人さ、一体何の意

味があるんだろうね？」

「僕だつて同じさ、今は剣道をやつても、結局は茶屋を継がなければならぬ」

「僕と貴様は同じか、だつたら一体何をするために生まれたんだろう？」

「伝統を絶やさないためだらう」

「それしか無いね」

「それよりも、貴様はいつになつたら一人称を統一するんだ」

「困ることもあるのか」

「無いが、僕としては気になるんだよ。文章だと『私』なのに、普通に喋る時は『僕』だ、そんな使い分けは妙に気になるんだよ」「文章と言葉は存在の仕方が違つんだよ、だつたら違つてもいいはずだ」

「なるほど、そう言つ考え方も出来るな

「納得したか？」

「いや、しない。だがお前がそつ考へてこむ」とは認めてやる。

私は夕方になると天川に出かける、道場を出ると私は潤一郎と別れそこへ向かう、それは京都の鴨川のように広く長く続いている、その川を挟んで西側を織姫と呼び、東側を彦星と呼ぶ、そして毎年七月七日にはいつもは封鎖している橋を開放し、織姫役の女性と彦星役の男性が再開すると言う催し物もやつている。

私はいつも彦星側の川沿いに腰掛け水の流れを眺めている。川の流れは毎日見ていても飽きない、いつだつて同じでは無いからだ。他の人に言わせれば「常に同じ」だが、私にとつては同じでは無い、いつだつて変化しているのだ。

次第に、向かい側の店が明かりを灯し始める。空は群青色に染まつていて、その下で優しい光を放つている。この川は鴨川によく似ているせいなのか、私のように水流を眺めに来る男女が多い、特に意味のない行為だと私は思う。

「お待たせしました」と私は声をかけられる。そこに居るのは和服が良く似合う女性だ。彼女の名前は沙織といひ。

「今日も私は負けてしまいました」と沙織は言つ。

「でも、君の稽古が終わる時間と僕の稽古が終わる時間は違うからね、どうしても僕が先に来てしまふんだよ」と私は言った。

「しかし、一度くらい聰様より先に着たいものです」

「そんなことをして何になる?」

「聰様をお待ちすることが出来ます」

「僕はいつも君を待っている側でありたい」と私は言つた。

私はいつも持つてゐる大きめの手巾を置き沙織はそこに腰を下ろす、彼女は微かな化粧しかせず、髪を染めることなく、どこまでも日本的な女性を目指していた。それが彼女の意志かそれとの彼女の両親の意思か、私は一度も訪ねたことが無い。

沙織は肩ほど長さの髪を持つていて、その黒い真珠の様な髪はいつでもどんな時でも真っ直ぐ下に伸びている髪型だった。和服はいつも薄い色に限られる、彼女は水色と桜色の着物が好みなのか、同じ色の着物を何着も持つていて、

「聰様」と沙織は言つ。

「なんだ?」と私は言った。

「今度私の琴を聴きに来ませんか?」

「琴?」

「秋は琴をやることにしています」

「琴か、こないだは花を見せてくれると言つたな、その前はお茶を」

「そうですね」

「わかつた、では今度は見せて貰うことを期待し、楽しみにしてい

る、顔。

何人かの外国の方達が私たちを見ては写真を撮つていたが、私たちはもうそんなことを気にすることは無くなつっていた。私たちはこ

の町の中でも珍しい分類の人間になつてているのだ。簡単に言えば服装である、今時普段着に和服を選ぶ若者などほとんど居ない、私はいつも和服だし、沙織も大体いつも着物だ、たまには違う時もあるけれど、それこそ本当に珍しいことだ。本来私たちくらいの年頃の若者は誰だって洋服を着たいのである、簡単に着られて、いろんな種類が在る、いろんな組み合わせ方が在り、何より動きやすい。では、なぜ我々は和服を着ているのか？私の場合は両親が和服しか与えてくれなかつたからである、彼らから見れば洋服を着こなしていれば時期に異文化に占領されてしまうのだそうだ。少なくとも我々だけは日本の文化を守らなくてはいけない、そしてこの町を。

と言うのが私の両親の考え方だ。つまり、ただ単に嫌つてているだけである。私だって洋服に興味を持つ時期も在つた、しかし、私が与えられた小遣いで洋服を買って来ても、どうしてか着る気にはならなかつた。だから、私は友人らと会う時はいつも和服だつた、ただ幸いなことに私が通つていた学校にも同じような人間が何人も居た、それは別に珍しくもなく、まったく普段通りのことだつたのだ。洋服を着ることを許された家の子供は私を見ても特に珍しくも無かつたようで、私は迫害されることも無かつた。

沙織がなぜいつも和服なのかは知らない、ただ私は彼女が先ほどのようにこの町を訪れた外国の方に特殊な目で見られることがいけ好かない。私は平氣だが、沙織はどうだろう？

「ねえ、君はさつきの様に外国の方に写真など撮られて平氣なのかい？」と私は訊いた。

「平氣です、少なくとも記念になれば、それで良いのです」と沙織は言った。

「もし、その写真が世界中に配信されていたらどうだ？」

「それは少々恐ろしいことです、先ほどの方たちはそのようなことをする人ではありません」

「そう思いたいね」

私達は今日一日の報告をする、私は潤一郎に負けたことと、あの中学生にやはり負けたことを報告した。

「聰様は季節毎に武道を変えていきますね、私の様に」と沙織は言つ。「父の言い付けなんだ、男子たるもの武術を極めねばならぬことと私は言つた。

「私は母に言われました、女性たるもの美を追求せねばならぬと」

「春には茶道、夏には華道、今は琴、冬は何をするのだ？」

「冬は田舞をやる予定です」

「それはぜひ見てみたいものだ」

沙織はその後、今日習得した琴の曲の話をした。お師匠様に「あなたは琴だけをやりなさい」と言われたが、「私は日本の美を求めています、琴の音色ではありますん」と言って断つたそうだ。さすがにお師匠様はがっかりされたようで、彼女は少し申し訳ない気持ちに支配されていた。

「それは、何も間違つていない」と私は言つ。

「しかし、お師匠様は大層がっかりされました、私は、私は」

「そんなこと前も言つていたな」

「そうでしたか？」

「夏だったかな、その時は僕はこう言つたね『君は従う必要はない』と」

沙織は私の言葉を思い出しているようだ。

「お師匠様は君を貰いたいんだ、後継者か何かにしようとしているのだろう」「うう」

「そうだとしたら、ますます私は酷いことを」と沙織は言つと顔を下に向けた。

「大丈夫、何も君が世界に一人しかいない才能の持ち主じゃないんだ、琴の世界に興味を持った人でなければ後継者は務まらない」

「私のほかにそのような人がいるでしょうか？」

「居るさ、きっと」

沙織の家はこの町では名の知れた名家だ。彼女の父親は有名な書道家であり、母親は和の伝道師と呼ばれている。だが、目立った交流は無く、私は一度も会ったことが無い。その人物に対しても何も知らなかつた。だから、こうして毎日会つてることも秘密にしている。秘密にする必要も無いと思うが、ただ言つ機会を逃しただけだつた。だからそのことを知つているのは潤一郎と夏華の二人だけである。

「聰様」と沙織は言つ。「帰りましょう」

「そうだね、ではまた明日」と私は言つた。

「失礼します」

沙織は立ち上がると短い足取りで歩いて行つた。

私はと言うと、まだ同じ場所に座つたままでいた。私はいつでもそうだ、ただ家にはあまり帰りたくない、ただこの場所で川に移る明りを見ていたい。

「どこにでも在るそんなことだつて、ここではそれ以外になる」そんなことを誰かが言つていた。それが誰だつたのかもう私は覚えていない。ただその言葉を聞いたのは春だつた気がする。その頃私は沙織に出会つた、突然に、どちらも準備なんか出来ていなかつた、ある日私と沙織の人生が交差した、そして交差した二つの線は一つの線になつた。

私が感じる沙織への感情は、たぶん誰だつて同じことを一度は経験することである。人はそれを「恋」だとか「愛」などと呼んだりする。しかし、私のこの感情はそれとは全く違う、それを簡単に説明することは出来ない。それは、本当にただ川に流れている紅葉のかけらの様な物。いつかはどこかへ行つてしまつ、そしてその行方については知る由もない。

私がそんな感情を覚えたのは沙織が初めてだつた、私は人間がこのような気持ちを持つなどと知つて少々戸惑つた、私はこの気持ちをどのように扱えばいいのか、さっぱり分からなかつた。この心の振動はどうすれば抑えられるのか、どうすれば解放できるのか、で

は私は何をすれば良いのか？ 考えは結局まとまらなかつた、だがそんなことも沙織と会つてゐるだけで私は考える必要の無いことだと思つよつとなつてゐた。

その後も同じ場所で黄昏てゐると、面部師範に出会い、そのままなすがままに師範の馴染みの店に連れ出されてしまつた。あまり目立たない隠れ家的な店だつた。その店で師範はワインを一本も一人で飲んでしまい、私も引っ張られる様に軽い物をいつもより沢山飲んでいた。

さすがに飲み過ぎたと思いながら、家に入るとちよづな関を横切る所だつた妹と出くわした。

「お兄様、今日はお飲みになつたのですか？」と妹は言つた。

「ああ、でも酔つてはいない」と私は言つた。

「茶漬けでも作りましょうか？」

「ああ、そうしてくれ」

私の妹が作る茶漬けは絶品である、彼女を嫁に貰つた男は幸せ者だと私は思つ。

「うむ、美味しい」と私は茶漬けを食べながら言つ。

「お兄様、私は妹ですが、食べながら言葉を発してはいけません」「すまない」

「今日はお付き合いですか？」

「いや、弓道の師範に偶然会つてね、誘われただけだよ」

「どれほど飲まれたのですか？」

「サワーを一杯とワインを少し

「ワインですか、私は飲んだことがありません」

「僕も初めてだつたよ、でも僕には合わない

「美味しくなかつたのですか？」

「さあ、人それぞれだと思う

「なんと言つワインですか？」

「セイラーヌと言つらしい

妹は沙織の様にいつも和服姿だが、どうやら西洋の文化に興味が在るようだ、だがしかしこんな家ではそんなこと出来ないだろう。

「僕はもう寝るよ」 と云つた。

「風呂が沸いてこますよ」と妹は云つた。

「いや、今日はもう寝るよ」

「そうですか、ではお休みなさい」

「お休み」と私は云つた。「とこりで、どうして僕が酒を飲んでいたと判つた? 僕はもう完全に酔いは醒めたと思つたのだが」「

「それはですね、今のお兄様はお酒臭いですか?」

私はいつものように朝早く目覚め、母の作った朝食を食べた。今日は卵焼きが追加されている。

「聰司さん、それを食べたら朝子を起こしてくださいな」と母は言つ。

「わかりました」と私は言つた。

私の妹は朝子と言つ名前なのだが、名前に反して朝はめっぽう弱い。花嫁学校に通つていた頃は大体遅刻間際での登校であった。妹の部屋の襖を開ける、広い部屋に化粧台と卓袱台が在る、そして部屋の真ん中よりちょっと西側辺りに妹は布団を敷いて寝ている。私は妹が化粧台の裏に外国の音楽を隠しているのを知つてゐる、なぜ隠す必要が在るのかと言つと、父が禁止してゐるためである、その他にも日本の音楽でも父が認めない物は私達兄妹は所有することができない。

「朝だぞ、起きなさい」と私は言つ。

妹は何も反応しない。変わらぬ寝息を立ててゐる。

私は妹の上半身を起こし揺すつてみると、すると妹は目を覚ました。しかし、彼女はまだ半分は夢の中らしかつた。

肌蹴た寝巻の間から彼女の乳当てが露わになる、さすがに父もそこまでは規制していない。なぜ妹が寝る時にだけ下着を付けているのかは分からぬ、それは男の私からすれば一生分かることでは無いと思う。

「起きなさい、みつともないぞ」と私は言つ。

「おにいさま?」と妹は言つた。

「そうだ、早く起きなさい」

そう言つた所で妹は完全に目が覚めたらしく、自分の格好を見て

恥ずかしくなつたようだつた。

「お兄様、こつちを見ないでください、恥ずかしいです」と妹は言う。

「ああ、すまない」と私は言った。「もう朝飯が出来てゐる、早く着替えなさい」

「はい」と妹は答えた。

台所に戻ると、母は言う。

「あの子はもうすぐ嫁に行くと言うのに、あれでは困りますね」「この家を出たら、母上の様になります」と私は言った。

「そうだと、いいのですけれど」

妹は今は二十二歳だ、彼女は遠くの町に在る和菓子屋へ嫁に行くことが決まつてゐる。そこはかなりの老舗であり、私の妹などで相応なのかと思つたほどだ。だが、その主人と女将さんはとても良い人であり、嫁姑の関係になつても大丈夫なはずである。その息子で妹の婚約者は今は銀行に勤めているが、後三年したら店の後を継ぐために店に入ることになつてゐる。私は何度か彼に会つたが、同じ年と言つこともあり、すぐに打ち解けることが出来た。どこにも欠点など無く、常に優しい、とにかく嫁は大事にするだらうことは一目で判つた。

私の父は女は嫁に行くまで処女でなければならない、と考える人物であつたので、妹はこれまでに一度も男と付き合つたことが無い、小学中学高校と通つてきて思いを寄せる男の一人や二人は当たり前のように居ただろうが、一步踏み出すまでは行かなかつたようだ。

一度だけ同学年の男子に告白されたと相談を持ちかけられたことも在るが、結局彼女はその申し出も断つていた。

妹は高校を卒業したら大学へ行きたいと言つてゐた、しかし、父はそれを拒否し花嫁学校へ行かせることにしてしまつた。私はさすがに抗議したのだが、父の考えは覆ることが無かつた。妹は何度も私の部屋に来ては、私の胸の中で泣いたものだ。どうして自分だけ

が、としきりに言つっていたのを私は覚えている。

私はそんな妹を優しく抱きしめてやる、それ以外に何をすれば良いのかさっぱり判らなかつた。

妹が大学で何を学びたかつたのか結局一度も聞き出せなかつたが。おそらく外国のことを探したかつたのだろう。

今回の結婚について妹はどう思つてゐるのか、結局彼女は一度も顔には出さなかつたし語ることも無かつた。だが、私は知つてゐる、彼女は言いたいことが在ると決まって口を噤んでしまうのだ。昔からそうだつた、夕食で珍しくカツが出た時、最後の一つを私が取るのか妹が取るのか、と言つう場面があつたが、結局妹はその時何も言わなかつた。私はカツを譲つてもらい、後で訊いたら、妹は何も言えなかつたと語つた。

そんな性格だから、今回の結婚についても何も言えないのだろう、自分でも何か言わなければ勝手に話が進んでしまうと言つうことも判つてゐるはずだが、どうしても言つことが出来ず、見合いから数ヶ月後に結婚を承諾してしまつた。

私は何度も妹を問い合わせた、本当にそれで良いのか？　と。
妹は何も言わなかつた。

私は道場へ向かつた、いつもよりは遅い時間である。だがそれでも朝の静けさと冷たさはいつもとそれほど変わらない気がする。板前修業中の若者に「今日は遅いじゃないですか」と言われ、「まあ、いろいろあつてね」などと言つてその場を後にした。

道場に着くともう扉は開いていた。中からは竹刀がまみえる音が聞こえてくる。少なくとも一人は確実に居るのだ。

中には師範と磯崎潤一郎が試合をしていた、師範は余裕の立ち振る舞いである、潤一郎は闇雲に面と銅を打つだけであつた。

私の存在に気づいた師範が軽く面を打ち、試合は終わつた。

「やあ、今日は遅かつたね、今日こそは君より早くこようと思つていつもより早く来たのだが、無意味な結果に終わつたね」と師範は

面を外して言った。

「まったく空氣の読めない奴だ」と潤一郎が言った。「もう少しで勝てそうだったのに」

「一方的だったよ」と私は言った。

潤一郎は竹刀を一度振った、ヒュンといつ音が私の耳に確かに届く。どうやら悔しかったのだろう。

「ならば、今日も貴様を打ちのめすだけだ」

「今日は手を抜かないよ」と私は言う。

「ほう、ならば今からやろうじやないか」

「臨むところ」

ここには私の方が少しだけ歴が長いので、あっさりと勝負は付いた。彼は銅の部分をいつも疎かにしている、私はそこを狙った。

「くそ、今日も負けないとと思ったのに」と潤一郎は言った。

「僕を甘く見るなよ」と私は言った。

潤一郎は何度も私に挑戦してきた、だが彼は試合の数を重ねる度に弱くなつていった。動きはいつも大げさだし、やたらと動き回る、相手の動きを見ずにやたらと面を狙つてくる、あれではすぐに体力を消耗してしまう。

「貴様、何かズルをしているのではないか」と潤一郎は言った。

「何を言う、僕は何もしちゃいないよ、君の動きが多いだけ」と私は言った。

「くそつ」

次の試合が終わつた時、潤一郎はその場に倒れた。もう体力の限界だったようで息を切らしていた。私も防具を外しその場に腰を下ろす、さすがに少しは疲れている。

その間師範は何も言つてこなかつた、何も言わないのは何か理由が在ると思うが、私にはそれが何なのか判るわけもない。

しばらくして、潤一郎が起き上がり防具を外し始める。

「秋にしか剣道をやらない奴に負けるなんてね」と彼は言った。

「君だつて春は『道しかやらないじゃないか』と私は言つた。

私達が言い合つてゐる間に師範は道場内から居なくなつていった。それはそれで不思議であるし、師範ならこゝで何かを言ひよつた気がしていた。だが、今は居ない。

塩と海苔の匂いが漂つて来る、どうやらもつぱになつたようだ。

「ほら、今日も作つたよ、一緒に食べよつよ」と師範の娘である富部夏華が言つた。その手にはお盆が在りその上に握り飯と味噌汁と簡単な付け合せが載つてゐる。

「ふむ、まあもうどうでも良いか」と潤一郎は言つた。

私達三人は道場の隅に腰を下ろし、一緒に昼食をとつた。

夏華の握り飯には塩むすびに海苔が巻かれているだけである、彼女は単純に中に具を入れるのが気に入らないようで具は何も入つてはいない、しかし私はそれを一番好む、なぜだか分からぬがとにかくそれが一番美味しい。

夏華は長い髪に高校の時の制服だと言うスカートを着て紺色のセーターを着てゐる、それにハイソックスを履いてゐるので、遠くから見れば女学生にも見えなくもない。しかし、その容姿は近くで見ればもっと大人びてゐる、化粧は殆どしないが、する必要も無いと私は思う。それはどこかの家の長女の様であり、同じ年にも関わらず私は彼女は姉の様に見えた。

「ところで君たちはどうして、季節毎に武道を変えるの?」と食事中に夏華は言つた。

潤一郎は味噌汁を飲んだ後に答えた。「父の言い付けなんだよ

」「僕も同じだ」

「へえ、前にも訊いたけど、なんでそれに従つの?」

「さあね」と私は答える。いちいちそんなこと考へるなんて無意味だ。

潤一郎は言つた。「君には判らないだろうが、男にはそういうこともやらなきゃいけない時期があるんだよ」

「終わつたらどうするの?」

「僕は旅館の後を継ぐために働く、たぶんどこの旅館に行かなければいけないね」

「僕はそのまま茶屋を継ぐ、別の場所へ行くかどうかは分からないうが」と私は言つ。

「他にやりたいことって無かつた?」と夏華は言つた。

「じゃあ、君はどうなんだ? 夏には『道をやつていたが、それ以外はここ』ですと僕たちに昼飯を作つてただけじゃないか

「私は、私は父を手伝わなきゃいけないから」

「僕たちも君と同じ気持ちさ」

「そうだね」と潤一郎も同意した。

「あ、そつ言えば言つてなかつたけど、明日はいじ開けないからね」と夏華は言つ。

私達は昼食を終えた後で、潤一郎が「もう一試合やるぞ」と言つている時だつた。

「どうして?」と私は質問した。

「明日はね、母の命日なの」

「ああ、そうだつたな、何か特別なことでもやるのか?」

「そうかもね、明日は父は母と初めて歩いた道とか、初めて口づけをした場所とか、初めて一人で入つた旅館とかね、そう言つ場所を巡るんだよ、母が死に際にそうしてくれつて言つたの

「何年続けるんだっけ?」

「私が十六歳の時に亡くなつたから、十年くらいやつてるね

「君は付いていかないのか?」

「とても付いていけないよ、父と母の二人だけの思い出なんだから」

「おい、早くしろ」と潤一郎が叫んだ。彼はもう防具を着け直していく、道場の真ん中に立つっていた。

私は潤一郎に一度だけ一本を取られたが、他は全部私が取つた。今日は珍しく本気になれた日だ。だが最終的に優位に立つていたの

は潤一郎だった、彼は今度は試合を重ねる度に強くなつていった、無駄な動きが無くなり、私の一瞬の隙を突こうとする、一本だけ取られたのは最後の試合だった、その時の潤一郎の目は今まで見たことの無いくらい真剣だった。確実に境地に達している。

「ふむ、やつと貴様に勝てたな」と潤一郎は言つた。

「もう満足しただろう」と私は言つた。

「そうだな、いや、しかしそまだだ

「まだやるのか？ そろそろ子供たちが来るぞ」

ちょうどその時私の様に毎日必ず一番最初にやつてくる小学五年生の男の子がやってきた。

「ふむ、ここで大人気ない所は見せられないな」と潤一郎は言つ。そして面を外した。
「疲れたでしょ、お茶飲むよね？」と夏華が麦茶の入ったグラスを持ちながら言つた。

「いだこうかな」

続々と門下生が集まつてくる、殆どは小学生ばかりだ、その一人一人に夏華はまず麦茶を与えた。秋でもこの時間は温かい、夜になれば一気に气温が下がるが、時々暑いと言いたくなるくらい暖かい時も在る、そういう時夏華はいつも麦茶を出していた。

門下生達は美味しい美味しいと言い、殆どの子供が一杯ほど飲んでいた。

「そういえば、師範が居ないね」と麦茶を飲みながら潤一郎が言つ。「確かに、先ほどから居ないよつだね」と私は言つた。

夏華に訊ねようと思つたが、夏華はグラスを洗いに行つていた。

「じゃあ、僕はもう帰るよ、君はどうする？」と私は言つ。
「そうだな、今日は彼らを見ているよ」と潤一郎は言つた。
「何を言つんだ、彼は君よりも断然強いんだぞ

「そういうことじやないんだよ」

「じゃあ、どういう理由で？」

「俺とお前が居なくなつたら、夏華しか居なくなるじゃないか」

「ああ、そういうことだったな」

「とにかく君は帰れ」

私は私服の和服に着換えた、道場を出ると道場の縁側に座つてゐる夏華を見つけた。その姿はどこか寂しげだ。

「どうかしたのか？」と私は声をかけた。

「ああ、君か」と夏華は言つた。「なんでも無いよ」「何にも無いのにそんな表情はしないだろ？」「うう

「まあ、でも毎年こうなるんだよ、この時期にはね」「母君のことか？」

「去年も母の命日には道場開けなかつたでしょ？」「そうだつたかな？」

「そうなのよ、今日はね母が倒れた日、そして明日は母が死んだ日、

そんな時に真剣に稽古をつけるなんて無理なのよ」

「そうか、なんだか嫌なこと思い出させてしまつたな、すまない」「いいの、もう思い出していたことだから」

「自分が死んだことで毎年嫌な思いをしているなんて君の母上が知つたら、悲しまれるぞ」

夏華は何も言わなかつた。

「潤一郎の奴がまだ残つてくれるそうだ」

「そうなの、後でお礼を言つておくわ」

私は道場を去つた、そして次に行くところは決まつてゐる。天川。いつもは私が先に来るはずだったが、今日は珍しく沙織が先に来てゐた。彼女は彦星側の土手に立つてゐた。今日は桜色の着物で艶やかな模様も入つてゐる。口には桜色の口紅をさしていて、髪型は私が初めて見る後ろでまとめられた髪型だつた。彼女の首筋に見えているうなじが色っぽく見えた。

「すまない、待たせたようだね」と私は言つ。

沙織は振り向き軽く頭を下げる。

「大丈夫です、私もたまにはこうしたいのです」

私達はとりあえずいつもの様にその場に腰路下ろす、そして今日

のことを報告し合つた。しかし師範の「ことは言わない」とした、悲しみは伝達してはいけないのだ。

「そういうえば、夏にも一度だけ君が先に来ていたことがあるな」と私は言つ。

「そうですね、その時は着なれない服を着た時でしたね」と沙織は言つた。

「そうだったな」

「私はもう一度着てみたいです」

「ならば、来年の夏も一緒にいよ」

「はい」と沙織は言つた。

沙織は今日の稽古は休んでしまつたと言つた。何か理由があるのかと訊ねたが大きな理由は無いそうだ、ただ私より先にこの場所に着たかったのだと。

「お師匠様には次の稽古の時叱られるかもされません」と沙織は言つ。

しばらく雑談をしていて、ふといふことを言つてみた。

「僕は明日は何も予定が無いのだが、君さえ良ければ明日一人で出掛けないか?」

「それはお誘いでですか?」と沙織は言つ。

「そうだよ」

沙織はしばらく考へた後に「お供します」と言つた。「これを機会に両親にも報告してよろしいでしょうか?」

「いいよ」

そうした後私達は別れ、今日はすぐに家に帰つたのだった。

その日の夕食は妹がこしらえた。私の好きな献立で見た目はいつも母が作ると何も違わない。味が少々薄い気がしたが、それほど気になるわけでも無かつた。

「お兄様、お口に合いますか?」と妹は言つ。

「ちゃんとした料理になつている」と私は言つた。

妹は喜んでいたようだが、それはあまり表に出さない性格なので、下を向き左手の人差し指をつねつていただけだつた。

最後に味噌汁も出たが、これはなかなかの味だつた、夏華のとはまた違う味わいだ。私が絶賛してやると、母が「これなら嫁いでも安心ですね」と言つた。

だが、その言葉で妹は喜ばず、むしろ気分が沈んだようだつた。なぜそんなことになるのか、私には分からぬ。おそらく女にしか分からない不安感と言う奴だろう。

私は食事を終えると、自室に戻り読みかけの小説を読み始めた。そろそろ寒くなつていたので炬燵を出し、座椅子に座つて本を開いた。

それは日本の古い純文学の本だつた。時代に取り残された今ではほとんど読まれなくなつた作家の作品だ。だが私はその作家の小説を好んで読んでいた、そこにある言葉の響きが私は好きだつたからだ。「それは春の日に君を思うように」「雪の様に散る花火」「君は青く輝き」この三つが特に心に響いた気がする。いつかふと思い出す言葉では無く、いつも頭に浮かぶ言葉はその三つだつた。時々妹と一緒に詩を書いている時、私はいつもその言葉を引用していた。だが考えてみればその言葉のすべてはその作家と同じだつた。だから妹にとつては初めての言葉ばかりだったので、彼女は自分の好物である鰯の煮つけの様に私が真似て書いた詩をとても気に入つていた。

私は小説に読みふけつていたので、誰かが私の部屋に入つてきたことにまったく気づかなかつた。そしてその人が私の炬燵に入つて來たことも。

時間にすると一時間ほど本を読み、ちょうど章が変わる所で私は本を閉じた。視線を外すと私の左前に妹が座つてるのが目に入った。「なんだ、居たのか」と私は言つ。「声をかけてくれれば良かつたのに」

「お兄様のお邪魔をするつもりはありませんでしたから」と妹は言

つた。

「何か用があるのか？」

「いえ」

「では、何をしに来たのだ？」

「何か理由が必要でしううか？」

「いや、我々は兄妹だからな、話くらい理由が無くとも良いだろ？」
私は本を炬燵机の上に置いた、妹はそれを手に取り一三三ページほど読んでいた。

「この小説はお兄様の詩にそっくりですね」

「僕の詩はほとんどこの作家の言葉だよ」

「私も好きになれるでしううか？」

「なれるよ、ならば貸してやう、他にも在るから」と私は言つと
本棚から作家の本を集めた場所を見てみる、作品は十三冊在り、私はその内から一冊ほど選ばうかと思つたのだが、どれを選ばうか迷つていた。

「お兄様どうかしましたか？」と妹は言ひ。

「いや、迷つてゐただけだ」と私は言つた。

「なるべく、入り易いのにしてください」

私はとりあえずこの作家の出世作を手に取つた、後の一冊をどうするのか迷つたが、妹は特に急き立てることもせず、ただ待つてくれていた。

私は迷つた挙句「短い赤き線」と言ひ作品を手に取つてみた、発行部数三十万部を超す作品だ。私は五番田位に好きな作品もある。私はその一冊を妹に手渡した。妹はしばらくそれを眺めた後、自分の後ろにそつと置いた。

「しかし、お兄様はいろんな書物をお読みになりますね」と妹は言ひ。

「ああ、特にこだわりは無いからな」

「ミステリからSFファンタジーとかまあまですが、どうしてそんなに範囲が広いのでしょうか？」

私はしばらく間を置く。

「朝子」と私は言つ。「たとえば君は他人が嫌いな物は自分も嫌いになつてしまふか?」

「いえ、そんなことは」

「ならば、そのような疑問は持たないことだな。自分の認めない物や、人が嫌うと言うだけの理由で自分も嫌いになつてはいけない、それは最低の人間だ、人に流されやすいと言つべきか、人の言うことしか信用しないと言つべきか、小説と言う物はどんな形をしていようが、自分の目で確かめなければ善し悪しなど分からぬのだ、それを自分の勝手な価値観だけで判断するのは、読書家として恥すべきことだ。お前も嫁に行つたら、自分の価値観や人の判断で物事を決めてはいけないよ、世の中には様々な人がいるんだ、すべては同じである、自分より下に見てはいけない、この人間と言つ生物の中には上も下も居ない、同じだ。分かるかい?」

「はい」と妹は返事をする。

「僕は人間関係のことを言つているんだ、お前もちゃんと人と付き合えよ、それから判断するんだ」

「わかりました」

「なぜ、小説の話からこんな話になつたのだろうか?」と私は言つ。自分で話しておきながらなぜ自分があんな話をする事になつたのか、もう忘れていた。

「何故でしようね?」と妹は言つて軽く笑つた。

「ところでお兄様」と妹は言つ。

「なんだ?」と私は言つた。

「明日のご予定は?」

「沙織と会つんだ」

「沙織さん」と妹は呟く。「どこかへ行かれるのですか?」

「そうだな、秋京寺（しづきょうじ）にでも行こうと思つてゐる」

「あの、紅葉が美しいお寺ですか?」

「

「そうだよ、そろそろ色づき始めていると思つ」

「そうですね」と妹は言つた。

妹はその後風呂に入りに行くと言い私の部屋から出て行つた、他のすることも無かつたので、小説の続きを読もうと思つたが、なぜか気分が出なかつた、先ほどは真剣に読めていたはずだつたのだが。私は茶を飲もうと思い、台所へ向かつた。この家の電話の前に妹が立つていた、そしてどこかへ電話をかけていた。

私はさほど氣にもせず茶を入れ、それを持って自室に戻ろうとした。そしてその時妹が私の前を通過した。

「どこに電話をかけていたのだ?」と私は要らぬ質問かと思つたが訊ねてみた。

「修一さんの所へ」と妹は言つた。

修一とは妹の婚約者である、私と同い年でありながら、私より長けている部分が多い男だ。

「何か用事があつたのか?」

「明日の『』予定を訊いていたのです」

「それで?」

「明日は休みを取ってくれるそうです」

「出かけるのか?」

「はい」

「そうか、気をつけろよ、そして楽しめ

「分かつています」と妹は言つた。

3

秋の佳久屋敷町を歩き、今確かに感じる乾いた風の感触を記憶する。記憶した時、それは一つの感覚として私の中に取り込まれる。全ての記憶の中で私は一つの風を思い出す。それは去年、まだ沙織の存在を知らなかつた秋の頃、私は妹と待ち合わせ食事に行くことになつっていた。なぜ食事に行くことになつたのか、もう定かではな

い。あるいは妹の方から誘つたのかもしれない、私は外に食事に行くなどと言つことはあまりしないから自ら誘つことなど滅多に無いのだ。

なぜ妹が待ち合わせて行こうと言つたのか、なぜ家の段階から行動を共にしないのか、その理由は未だに判らないまだ。

その待ち合わせに向かう途中私はその風を記憶した、確かにあの時と同じ物だ。あの時、妹は先に待っていて、私が近付いた時心の底から喜んだ様に笑顔になつた。

注意深く人を見る、と剣道の富部師範が言つていたことがある。その時は稽古中だったから、剣道のことだと思つた。それは本当のことなのだが、今の私にはそれは別の意味を持つた言葉にも聞こえる。その理由、たとえば注意深くなつて相手の髪型の変化や、化粧の変化に気づいてやる。そんな所について注意深くなれと言つことだ。

だが、今の沙織には注意深くなるうが見分けられる所など無かつた。前に何度か見たことのある水色の着物、帯は赤く、髪型だつていつも見ている通りだ。

私が師範の言葉を思い出したのは、その日沙織に会つた時だった。沙織と待ち合わせるのはいつも川の側である。それ以外に目印になりそうな物はあいにくこの町には存在しなかつた。

時刻としては午前十時頃、だつたと思う、私は時計を持ち歩かないで正確な時間は分からぬ。家を出たのは十時十五分前だつた、私は川沿いに腰かけいつも変化し続ける水を眺めながら歩いていた。さわさわと言う風の音と、風に揺られる竹林の音がどこからか聞こえてくる。この近くに竹林など無かつたはずだが、どこから聞こえてくるのだろう?

空はまるで青い絵具を水に溶かしたような色をしている。雲はまだ夏の気配を残しているようにも見えるが、風はやや強く少々冷た。しかし耐えられない程では無く、いつでも心地の良い風である。

沙織は中々現れなかつた、もしかしたら私は場所を間違えたのかと不安に思つたりもした。私も沙織も連絡手段を持っていなかつたので連絡のしようがない。ただ私は待つことしか出来ない。

私は言つた「明日の午後十時前後にここで」沙織は「わかりました」と答えた。竹林の音が消え、その代わりに雲の流れる音が聞こえた、重くそれは確かに動く音だつた。

「お待たせしました」と誰かが言つ。

私はその声の発せられた方向に目を向ける。そこには沙織が居た、すでに述べた格好で。

「すみません」と沙織は言つ。「少々準備に手間取りまして」

「いや、気にしなくていい」と私は言つた「待つのは好きなんだ」沙織は本当に申し訳なさそうな表情をした。おそらく何かと準備に手間取つたのか、あるいは男と出かけると言つことを両親に伝えたことで何か揉めたのかもしれない。

「君の両親は何と言つていた? ビコの馬の骨だか分からぬ奴とか言つっていたかい?」

「いえ、そんなことは」と沙織は言つが、おそらく私が予想した通りだと思つた。

「では、行こうか」

「はい」と沙織は言つ。「どちらに?」

「秋京寺」

秋京寺は三千境の中でも穴場である。観光客はあまり訪れず、少々複雑な道を通らなくてはいけない。それに他の寺の紅葉の方が世間的には有名で、私達がこれから行く寺を知つてているのは地元の人間くらいだ。敷地は広いが、建物はそれほど立派では無い。しかし住職は良い話を聽かせてくれる。私は学生の時何度もお説教をしてもらつたことがあるが、今ではそれは私の財産となつていて。

その寺へ向かう途中、我々は特に話をしなかつた、お互に黙つて歩いているだけだ。沙織の歩幅は狭いので私は歩調を調整する必

要があつた。会話が必要だと思わないほどに私は彼のことだけを見ていた。沙織が常に下を向いて歩いていることも、彼女が自分の小さな鞄を両手の先で持っていることも、何もかもが愛おしく感じる。

この町で一番大きな道から外れ入り組んだ迷路のような路地を歩いていく、すると少しだけ開けた道路に出る。車は滅多に通らない道路で、歩いている人だつてそれほど居ない。そしてその道路の先に秋京寺が在る。周囲はやけに静かで閑散としているが、立派な門をくぐると紅葉に染まつた木々が何本も出迎えてくれる。赤や黄、地面にはその色の落葉が積もつていて。朝に坊主が履いたはずだが、次々と次の葉が落ち、それは以前見た桜の様にそれはひらひらと舞つていた。私達はその様子をまずは見続けていた。

本堂への道にも当然のように紅葉が降り積もつていて。私はなるべく紅葉を踏まないようにして道を歩き、後ろにいる沙織を見た。そこには美しき姿をしている沙織の姿が在つた、美しき着物を着たそれこそ川に映る町の明りの様な。

「美しいです」と沙織は言つ。

「初めて来たのか?」と私は言つた。

「そうですね」

「僕は秋になると必ずここへ来るんだ、まるで自分のための紅葉の様に見えないか?」

沙織は周りを見渡している、左から右へ、右から右へ、そしてその場で回っていた。

「聰様と私の物ですね」

「そうだよ」

紅葉の葉っぱが休みなく舞つていて、赤と黄色の絨毯が敷かれているように見える。赤い葉を付ける木の間から青い空が見えた、それほどこのかの風景画のようで、目の錯覚を起こしたのかと思つてしまつた。

今まで見たことの無い青い色だつた、春と夏とはまた違う青、そ

う言えば春と夏にも同じようなことを思つたことがあつた。春と夏に、それはやはり沙織が側に居て、一人で歩いていた日だった。あの時の青色を思い出そうにも思い出しがれなかつた。その色はその時一瞬だけの色だった、そつとしか思えない。

「聰様？」と沙織は言つた。

「ん？　どうかしたか？」と私は言つた。

「どこか、様子が」

「いや、僕はどこもおかしくなんか無いよ、ちょっと以前のことを見出していくだけだ」

「どんなことを？」

「君と一緒に歩いた日のことを」

「こうして、一人だけで出掛けるのは三度目ですね」

「せうだつたかな？　もつと有るような気がするが」

「私は覚えてりますよ、春と夏にそして今日」

沙織は指を三本立て私に見せてやつた。

「では、その時の空の色を覚えているか？」と私は質問する。

「空の色？」と沙織は言つた。

「そう、どんな青をしていたのかどうしても思い出せないのだ」

「春の青、春はどことなく水色に近いですね、まだ少し冬の空を残しているような」

「夏はどんな色だ？」

「夏の青、それは一番透明な青だと私は思いますが、一番本来の青に近い色です、私は夏の空が好きですね」

「ならば、今の空はどんな風に思つ？」

「秋の青、そうですね、まるで青い絵具を水に溶かしたような感じがします、今この紅葉の後ろに在るので、まるで風景画の様に見えます」

「僕も同じようなことを考へていた」と私は言つた。

「あり、聰様も？」と沙織は言つた。

「まるで風景画だ」

私達はその後境内を歩いて回った。本堂の横には池が在り、そこにはやはり赤や黄色の葉が浮かんでいた。沙織はしゃがみその一枚を取り、そしてそれを私に渡した、赤い色をしていて、水を含んでいるので冷たい感触がした。

沙織はその後何枚かを掬い上げ、大事に手のひらに乗せて見つめていた。

私と沙織のその様子を寺の住職が黙つて見つめていた。私達は気づいた後に頭を下げた。すると住職は寺の中へ招き入れてくれた、そして美しい話を聽かせてくれた。それは紅葉と川を題材にした話で、川の上流に住む青年と下流に住む娘の話だつた。あまり仏教としての教えが無い物語で、一体誰が考えた物語なのか私には分からなかつた。

二人はある時恋に落ちる、それは一つの決まりごとの様に。しかし二人は娘の方が強引に嫁に出されると言う形で引き裂かれることになつた。そして最後の夜に一人は一つの約束を交わしたが、それ以来二人は一度と再会することが無かつた。交わした約束とは秋が着たら青年が紅葉を川に流す、もしそれを娘が拾うことが出来たならば、一人で逃げようと言う約束だつた。そしてある秋の日から青年は紅葉を川へ流し続けた。紅葉は川を滑る様に流れしていく、そしていつしか彼女の元へ届くとそう信じている。しかし娘がその紅葉を拾おうことは無かつた。青年が紅葉を流した川と娘が待ち続けていた川は全く別の物だつたからだ。青年は紅葉を流し、娘は流れてこない紅葉を待ち続けている。どちらの思いも届かないままに時間だけがただ流れで行く。

それでも青年は何日も何日も紅葉を流しては娘を待ち続けた。待つていれば彼女が紅葉を持ち現れると思ったからだ。しかしそんなことはやはり無かつた。青年はその年に初めて降つた雪を見て思つた。ああ、俺はやはり一人なのだと、青年は村を出て、遠くまで走つた。とにかく遠くへ、誰も自分の損座など知らない場所へ、

そして行きついた場所は秋京寺と言つ寺だつた。青年は出家し仏門の道へ入つた、もう一度と二人が再開することが無くなつた瞬間だつた。そしてその時を同じくして娘は若くして病氣で死んだ。

その話が終わると若い僧侶が茶を出してくれた、私の家の茶だつた。

「そうですか、これはあなたの家の」と住職は言つと茶をすすつた。
「私は大変好ましい」

私は礼を言つた。

住職の話が終わると私達は廊下を歩いていた、すると。

「お一人は将来縁を結ぶのですか?」と住職は言つた。

「いえ、それはまだ判りません」と私は言つた。

「そうですか、お一人なら必ずや仏が見守つてくれるはずです」
沙織は何も言わなかつた。

「すべては貴方次第です」と住職は言つ。「彼女が幸せになるかどうかはすべて貴方次第、ぜひとも幸せにしてさしあげなさい」

入つて来た時と同じ紅葉の道を歩く、沙織はまだ黙つたままだつた。

門を出た時、空が開けたような気がした、空は広く雲も無くなつていて、太陽の光が眩しい。

「聰様」と沙織は言つ。

「なんだ?」と私は言つた。

「私達の子は幸せになるでしょうが?」「なるとも

「しかし、私は子を産むことが出来ません」

「でも、僕はそんなことで君を嫌つたりはしないから」「本当に?」

「ああ、本当に」

「明日私が死ぬと分かっていても?」

「明日君が死ぬなら、今日は精一杯君を愛してやろう

「ありがとうございます」と沙織は言つ「でも、私は明日死にません」

「分かっているよ」と私は言った。

沙織は以前から「私は子供を宿すことが出来ない」などとしきりに語ついていた。それが不妊症であるのかは確認をしたことが無いので分からない。それは彼女の妄想なのかも知れない。しかし、たとえそれが避けられぬ事実だつたとしても、私はたかがそんな理由一つで彼女から離れようなどとは絶対に思わない。

私達は昼食をとるためまた大通りに戻り、人通りの多い路地にある茶漬け屋に入った。そこは茶漬けと梅干が美味しいと評判の店だが、雑誌等々に載ることは滅多に無いので、大繁盛とまでは行かない。しかし場所が場所なだけに、客足は絶えない。何より梅干が美味しい。私は海苔茶漬けを頼み、沙織は梅茶漬けを頼んだ。私は梅干しはまた別の物として頂くことを好んでいた。

何人かの洋服を着ている婦人らが私達を時折ちらりと見たりしていた。そんなに私達は珍しい存在なのか、と思つた。

出された茶漬けを食べるのだが、やはり私の妹が作る物とは全く違つのだなと思った。この店の物も確かに美味しい、でもやはり妹の物の方が私は好みだ。しかし、一体何が違うと言うのか？ それはただ単に茶と山葵の違いだろう、私はいつも海苔茶漬けしか食わない、妹もそれを知っているのでそれしか作らない。やはり食べなれた方が美味しいと言うやつだろうか。

「美味しいです」と沙織は言う。

「美味いか？ それは良かつた」と私は言った。

「こんな店今まで知りませんでした」

「そうか、じゃあこれからも利用しなさい」

「はい」と沙織は返事をすると微笑んだ。

最後に漬物と梅干を食べ、勘定を払つて店を出た。しかしこの後どうするかと言つことを私は全く考えていなかつた。

「「」の後はどこに行きましょうか？」と沙織は言つ。

「「」の後については考えていなかつた」と私は正直に言つた。考へるのを忘れたのでは無く考へることが最初から頭に無かつたと言つべきだらう。女性をエスコートする身でありながら、何とも情けない失態だつた。

結局私達は当てもなく散歩することにした。特に目的地も無く、ただとにかく町の中にあるふれる紅葉を見ようと言つことだ。

町の中にはいたるところに紅葉した木々が立つてゐる。それは森とも林とも言えない、ただ所処に立つてゐるだけである。多くの木は黄色の葉を付けていて、その下に在る道路には黄色い葉が數え切れぬほど積もつてゐる。そして、それは時折吹く風によつて少しばかり移動していた。

沙織は時々立ち止まつてその木を見ていた、私は私でたまに彼女が立ち止まつたことに気づかず先へ進んでいることもあつた。

そう言つ時私は慌てて彼女の元へ戻り、ただ何も言わずに同じようく木を見つめていた。

「ねえ、聰様、分かりますか？ この木だつて冬になれば枝だけになつてしまふんですよ」と沙織は言つ。

「そうだな」と私は言つた。

「冬になれば全てが無くなつてしまします

「また生き返る準備をしているのだよ」

「生き返る？」

「そう、また新しい葉だ、一つ一つが新しい命だ」

沙織はこれ以上話を続けなかつた。しかし、紅葉を眺める彼女の目が少しばかり変つた。

結局その後も私達は当ても無く歩き続けた。時々冷たい風が吹き、私は少々寒いなと思つてゐた。沙織は肩掛けをしてゐたので、それほど寒がつてはいなかつたが、私は寒かつた。

「大丈夫ですか？」と沙織は言つ。

「大丈夫だ、ただちょっと休憩したいな」と私は言った。

「でしたら、あそこに入りましょう」と沙織は言うと、道路を挟んだ向こう側に在るカフェを指差した。洋風な佇まいで、中に居る人や働いている人も皆洋服を着ている。

「あんな所に我々が入つてもいいのか?」と私は言つ。

「大丈夫ですよ、何も悪いことしてないんですから」と沙織は言った。

「しかし」

「大丈夫です、行きましょう」

そう言うと沙織はてくてくと歩きだした。

ちょうど青信号になつた横断歩道を渡り、私達はその店の前に立つた。さすがにこんな所に和服で入るのは少し勇気がいる。私の様な人間が入つたら空気が悪くなるはずだ。

しかし、沙織は何も気にすることなく扉を開けて中に入つて行った。私も続いて入り店内の暖かさに懐かしさを覚え、珈琲らしい良い匂いに心までもが温かく成る様な感覚を覚えた。

元気の良い娘が我々を席に案内してくれた。中に居た数人の客が和服姿の私達をちらつと見たが、特に気にすることも無く、自分の本や友人と話の続きを戻つて行つた。客たちは私達のことなどさほど話題にはしなかつた、それはそれで少し安心する。

「ご注文はお決まりですか?」と娘が言つ。

「僕はコーヒーを貰おう、君は?」と私は言つた。

「私はミルクティーを」

沙織がそう言うと、娘は元気よく「少々お待ちください」と言つて去つて行つた。

「こんな所に来るのは初めてだ」と私は言つ。

「私もそうですよ」と沙織は言つた。

「我々には縁遠い店だ」

「聴様は珈琲を飲んだことが?」

「無い」

「どうしてですか？」

「僕は日本茶しか飲めない、一応お茶屋の跡取りだからね」

「私は珈琲は飲んだことがあります、あれは苦いですね」

「そうなのか、僕は珈琲も飲んだことが無い。いつも匂いだけで我慢していた、飲みたいと思つた所で、そんなこと出来なんだからさ」

「しかし、「コーヒー」と言つ葉は知つていたと?」

「ああ、今言つただろ? 僕はお茶屋の跡取りだって、日本茶しか知らないわけじゃない」

「私はお茶では日本の物しか飲んだことがありません」

「僕もそうだ、今の世の中にはいろんな飲んでみたい物が在る。酒はまだカクテルしか飲めないが、とりあえず「コーラ」と言う物を飲んでみたい、相当甘いらしい。後は「ココア」とか「コーヒー牛乳なるものまで」

私はいつでもあの赤い筒に閉じ込められている黒い液体に憧れを持つていた。私が物心付いた時から目にしていた、あの飲料水。果たしてどんな味がするものかといつも思つていた。そして私のその言葉を聞き、沙織はふつと思い出したように言つた。

「あ、「コーラは私飲んだことがあります」

「ほう、どんな味だったか覚えているか?」

「そうですね、とにかく甘く、飲むと舌がピリピリします」

「それは痛いのか?」

「いえ、炭酸と言つららしいのですが、これが中々良い演出をしています」

「飲んだ感じは分かつた、だが肝心の味はどうなんだ?」「味ですか? そうですね、例えようが無いですね」

「そうか」

「でも、聰様あの時私は言いましたよ『お飲みになりますか?』と「それはいつのことだ?」

「夏です、今の様に一人で出掛けた時、自動販売機で私はコーラを買いました」

「そうだったかな」

私は夏のことを思い出そうとした、夏かほんの数ヵ月前の出来ごとだ、あの暑い日常が今ではもう無かったことの様に日々その姿形を変え続けている。そんな頃だ、今の様に町を歩いている時、ふと沙織が自動販売機の前で立ち止まり赤い缶を買った。私は彼女がそれを美味そうに飲んでいるのを羨ましそうに眺め、彼女が勧めてくれた時も、私は茶屋の息子だから飲んではダメだと自分に言い聞かせ断つたのだ。

そんなことを話していると、さっきの店員が珈琲と紅茶の入ったカップと白い液体の入った小さな容器を置いた。

「ごゆっくりどうぞ」と店員の娘は言った。

私は少しだけ珈琲の匂いを嗅いだ後。

「これは何だろう?」と言いつて、白い液体を指差した。

「ミルクですかね?」と沙織は言つ。どうやらこれも入れるとことなのだろう。

「入れればいいんだな? どれくらいだらう?」

「少しで良いと思います」

「砂糖も入れるのか?」

「お好みで」

私は四角く固まつた砂糖を一つばかり入れ、ミルクも少し入れかき混ぜた。どんな味がするものかと期待していた。

しかし、実際に口に入れてみると私の口には合わない物だったことが分かつた。やはり日本の飲み物に慣れ過ぎた舌が良くなかったようだ。

「僕はあまり好きじゃないな」と私は言つ。

「そうですか? 私はすごく好きです」と沙織は微笑みながら言った。

「僕の分も飲んでくれ」

「ダメです、それは聴様が全て飲まなければいけません」

「いや、しかし」

沙織は私のことをじつと見つめた、飲めと言っているのが分かる。私はもう一口程飲んでみる、甘いような苦いような味が口の中に広がる。微かにとろける様な感じがするが、やはり日本のお茶とは全く違う。そもそも種類が違う。

だがしかし、最後の一 口になつた時、私はこの味を好いていることに気づいた。最初はただ戸惑つていただけで、ちゃんと味を確かめれば、世界中に普及する物だと分かる。

「美味しいですよ?」と沙織は言つ。

「確かに」

沙織は小さい声を出して笑つた。

その時、店の扉が開き、誰かが店の中に入つて來た。

それは剣道の富部師範だつた。師範は普段あまり見ない私服姿で一人だつた。私が最初に気づき声をかけようかと思ったが、夏華の話を思い出し、ほつといた方が良いと判断した。

しかし、次に気づいたのは師範だつた、師範は私に気づくと私達の席に近付いて來た。

「やあ、君がこんな所にいるなんて驚きだね」

「たまたま寄つたんですよ」と私は言つた。

「そうか、しかし君がこんな綺麗な娘さんを連れていくとは」

「ここにちは」と沙織は言つ。

「うむ、ここにちは」と師範も言つた。

「今日はお一人ですか?」

「そうだけどね、あ、ここに座つてもいいかい?」

「どうぞ、いいですよね?」と沙織は言つ。

「いいですよ」と私は言つた。

「ありがとう」と師範は言つと、三つ在つた椅子の一つに座つた。

師範と沙織は自己紹介をした、自分は誰々で私とどんな関係なのか、沙織は師範が私の師だと知ると「あ、そうでしたか、どうか非礼をお許しください」と言つた。

「いやいや、そんなこと気にする」とじゃない」と師範は優しく言った。

師範はやつて来た店員に紅茶とチーズケーキを注文した。

「こここのチーズケーキは美味いんだよ、君達は何か食べたかい?」

「いえ、僕には食べる資格が有りません」と私は言つ。

「それはどう言つ意味だね?」

「僕は茶屋の跡取りです、西洋の菓子などもつてのほか

「別に茶屋の人間だつて甘い物くらい食べたいだろ?」

「確かに洋菓子も食べてみたいのですが、僕は和の人間、和菓子の方が似合います」

「つまり君は自分の家柄に似合わない物には手を付けないと?」

「そう言つことになります」

「それはどうして?」と師範は真面目な顔で言つ。

「それは

私は言葉に詰まつてしまつ。私が西洋の物に手を付けないのは父が禁止しているからであり、それに背いては顔向かが出来ないと思っていた。

「父が何かと煩くて」と私は言つ。

「そうか父上が」と師範は言つた。「しかし、なんで君はそんなことに従うのだ?」

「父の言うことですから」

「そうかもしけない、でも君は父の物であつてそうではない、君は君の物もある、例え父親だらうと君に何もかもを押ししつけるのは良くないし、従うのも悪い」

私は何も言わない。

「と私は思うよ」

その時師範の注文した物が運ばれて來た、確かに美味そうなケーキだつた。師範はそれをとても美味そうに食べていた。

「君はいつも和服だが、洋服は着ないのかね?」と師範は言つ。

「今年の夏に一度だけ着たことがあります」と私は答える。

「ほう、それはなぜその時だけ？」

「僕の妹が突然僕のために洋服を買つててくれたのです、だから一度も着ないのは勿体無いし、妹にも悪いので一度だけ着てみるとにしたんです。その時もこうして沙織と一緒に歩いていました」

「彼女も洋服を？」

「そうです、なぜ判つたのですか？」

「そう言つ気がしたんだよ」

師範は紅茶を何も入れずに飲んだ。そしてケーキの最後の一口を食べると、こう言つた。

「やはり、こここのチーズケーキは美味だな」

「よく来られるのですか？」と沙織が質問する。

「まあ、そうだね、ここは昔この店になる前はお洒落な喫茶店だったんだ。もちろん私の世代がお洒落だと思う店だよ、私はその店によく妻と一緒に着ていてね、いつも頼むのは紅茶とチーズケーキだつた。でも、店のマスターが年を取つてね、後を継ぐ人も居なかつたから閉めることになった。私は酷くガッカリしたけどね、次の、つまりこの店をやる人がね、こここのチーズケーキとチョコレートケーキと紅茶と珈琲、これだけはレシピを引き継がせてくれと頼み込んだんだ。私は嬉しかったね、結構若い人だったから古臭いレシピなんか興味無いと思つていた。でも店が新しくなつてから初めてここでケーキを食べた時、あの時の気持ちは忘れられないよ、これで妻との思い出も引き継がれたと思つてさ」

「奥さまと何か良い思い出が？」

「初めて一人で出掛けた時に、最初に入つた店がその喫茶店だつた。お互い何を喋れば良いのか判らなくてね、ずっと黙つたままだつた。でも出てきたこのケーキを食べたら、妻は美味しいと言つてね、私も同意した、その時に何かが外れたんだね、私達はその一瞬だけで打ち解けてしまったのだ、思えばこのチーズケーキから全てが始まつたんだ」

「それは良い思い出ですね」と沙織は言つた。

「その通り」と師範も言つた。

沙織は今日は師範の奥さんの命日だとは知らない、でも師範も特に気にする事も無く、むしろ自分の妻のことを話せて楽しそうにしていた。やはり命日とは死を惜しむ日では無いと私は思った。

「「」の後はどうするんだね?」と店を出た時に師範は言つた。

「また、少しふらふらするつもりです」と私は答える。

「そうかい、最近は日が沈むのが早いからあまり遠くには行かないよつこ」「元気

「わかりました

「では失敬」

「さようなら」と沙織は言つた。

師範は我々とは違う方向に歩いて行った。

その後私達は言葉通りに町を歩いて回つた。師範の言つた通り、空は段々色づいて行き、気づけば空はもう橙色に染まっていた。幸いなことに我々は天川の側を歩いていて、もうそのまま別れることにした。

「さようなら」と沙織は言つた。「楽しかったです」

「僕も楽しかった、今日は無理を言つてすまなかつた」と私は言つた。

「いえ、大丈夫ですから」

「そうか、ならばこれで失礼するよ」

「では、また明日いつもの場所で」

「うむ」

沙織は小さな歩幅で歩いて行き、私は彼女が見えなくなるまで見つめ続けていた。彼女は一度も振り返ることも無く歩いて行く、そして見えなくなつてしまつと私は心のどこかが寂しい気持ちになつた。

家に戻るとちよつと妹達も帰つて所で、彼女は婚約者の修一氏の

フェアレディZからドアを開けてもらい降りる所だった。

修一氏は妹を車から降ろすとドアを閉め私に頭を下げる。

「やあ、悪かったね、今日は仕事だつたんだろう？」それなのに急

に妹のワガママに付き合つてくれて」と私は声をかけた。

「そんなことは無いですよ、僕も朝子さんからお誘いが着て嬉しかったです」と修一氏は言つ。

「君、前から言つているだろ？、僕たちはもうすぐ親戚になるんだ、それに僕と君は同じ年だ、だからそのような敬語は使われるな」

「でも、僕の兄になる人ですから」

「同じ年に兄も弟もあるか、我々は対等だ、氣を使うことは無い」

「そうですか？」

「そうだ」

「では、次からは氣を付けることになります」と修一氏は親しげに言う。

「いや、でも本当に悪かったな」

「気のこと無いです、今日の朝子さんはちょっと元気が無かつたみたいだけだ」

「元気が無かつた？」

「いつも笑顔でいてくれたけれど、でも婚約者の僕には分かる」

「後で注意しておこう、もうすぐ君の妻になると言つのに、またたぐ」

「そんなことまでしなくていいですよ、僕は楽しかったから」

「それなら良いんだが、まあ、あらためて言つのも何だが、どうか妹を宜しく頼む」と私は言って頭を下げた。

「大丈夫です、僕はしっかりした和菓子職人になりますから。ちゃんと朝子さんを幸せにしてやりますよ」

「ありがとうございます」

妹は私達のその会話を聞いていないふりをしていた。でも多分最初から最後まで聞いていた。

「じゃあ、朝子さん、僕は帰りますよ」と修一氏は言つ。

「あ、さよなら、修一さん」と妹は言つた。

修一氏は自分の車に乗ると颯爽と去つて行つた。

「良い青年だな、僕とは大違ひだ」と私は言つ。「良い人を選んだなお前は」

妹は何も言わずに家に入つて行つた。

その日妹は自室から出てこなかつた。私が食事の準備が出来たと報告しに行き、部屋の外から声をかけても妹は返事もせずに、部屋にこもり続けた。

耐えかねた私は妹の部屋に入つてみた。部屋の中は暗く明りは灯つていなかつた。窓の外からは月の明りが差し込み、部屋の一部を照らしている、その中に妹は居た。彼女は光の中に腰を下ろし、月を眺めていた。

妹は寝間着姿で部屋の中は凍りついたように冷えていた。

「なぜそんな恰好をしている」と私は言つ。

妹は何も答えない。体を動かすことも、声を上げることも、視線を逸らすことも無い。

「聞いているのか？」

やはり返事は無い。

「風邪を引いてしまうぞ」そう言つても、返事は帰つてこない。

私は妹の側に寄つてみた、まるで作られた人形の様に固まつている。

私は妹の肩に手を触れてみる、それは確かに熱かつた。人間の体温では無かつた。もうすでに熱を出していると私は咄嗟に思つた。首元を触り、額に触れてみる、やはり熱い。ただ汗は一つもかいていなかつた。寝間着も乾いているし、肌もサラサラとしている。何か妹の体に異変が在ると私は思つた。

母に報告しに行こうと思い立ち上がつた。だがその時妹は口を開いた。

「お兄様、待つてください」

「やつと氣づいたが、どうやらお前はどにか具合が悪い様だ。すぐに医者を呼んでくるから」

「いえ、私は大丈夫ですか？」

「大丈夫なものか、そんなに熱を出していて」「いいから、とりあえず私の側に居てください」

「しかし」

「お願い」

普段私に頼みごとなどあまりしない妹が、そんなことを言った。「月を見てください」

私は妹の隣に腰を下ろし、ぼんやりと浮かんでいる月を眺めた。そして次に月明かりに照らされている妹を見つめた、それは確かに美しかった。普段見ていらない光の反射により、妹はいつもより艶やかで麗しかった。

不意に妹が私の体に寄り添つて来た、そして私の手を掴み軽く握り、自分の頭を私の肩に乗せた。

妹の体温が私の体に伝わつてくる感じが確かに感じ取れた。

妹は掴んでいた私の手を動かし自分の胸に当てる。私の手にはふくよかな妹の膨らみが在つた。そこには確かに鼓動をしている心臓の感覚も混じつている。

「お兄様、判りますか？　私の心臓はこんなにも鼓動しているのですよ」

「判るよ、とりあえず手を放してくれないか」と私は言った。

しかし、妹は手を放さなかつた、それどころか私の手を使い自分の胸を愛撫し始めた。その時私は氣づいたが、妹は下着を付けていなかつた。

私が無理やり手を放し「何をするのだ」と言つと。

「嫌ですか？」と妹は言つた。

「嫌も何も、こんなことしてはいけない」

「なぜですか？」

「我々は兄妹ではないか」

「それは重要な問題でしょ、うか？」

「お前はやはり熱で少々頭が狂っているようだ、これは早く医者に見せなければ」

私は妹の部屋を出て行った、そしてすぐにかかりつけの医師に電話をし、事情を話すと医師はすぐにやつて着てくれた。

母は心配していたが、診察を終えた医師は「まったくの健康状態ですな、電話では熱が在ると仰っていたが、今は熱も下がっているようだ、おそらく何か彼女を興奮させた物があるようですな」と言った。

医師が帰つて行くと、母は妹の熱を測つたが、その時にも熱は無かった。

「聴司さん本当に子は熱があつたのですか？」と母は訊ねて來た。

「確かに熱があつた、僕は肩と額しか触つていませんが」と私は言った。

「そうですか、まあ、とにかく今日はもう寝かせましょう」妹は何も言わずに、私の顔だけを見ていた。

「聴司さんの顔に何か付いているのかしら?」と母は言った。

私は一応顔を擦つてみた。

母は妹が寝付くまで側に居てやつてくれと頼んだ。私はそれを承知し部屋に残つた。

妹は目を閉じることも無く、私の顔を見ていた。

「先ほどは何故あのようなことをしたのだ?」と私は問つ。「しなくてはいけなかつたからです」と妹は言つた。

「なぜ?」

「私の気持ちが治まりません」

「何があつたのか? 修一君と」

「何もありません」

「では月の光に興奮したのか? お前は狼では無いだろ?」

妹は何も言わなかつた。

「まあ、それはもう良いか、熱も下がつたようだし、お前にどっこも異常が無かつたことだし」

「お兄様」

「そういえば、さつき修一君から聞いたが、お前は今日ずっと元気が無かつた様だな、お前から誘つておいて不機嫌な態度を取るのは失礼だぞ」

「しかし」

「お前はもうすぐ彼の嫁になる、嫁は常に笑顔を絶やしてはいけない、彼の心を癒すのがお前の仕事になるのだ、それを肝に銘じておけ」

妹は私から視線を逸らし、体を私と反対方向に向けた。声は聞こえなかつたが、妹の体が震えているのが判つた。

次第に声が漏れて来た、息を吸つて吐いている。まるで涙を流しているようだ。

「おい、どうしたのだ？」と私は言つ。

「何でも無いです」と妹は言つた。「本当に何でも無いんです

「しかしな

「もう出て行つてください

「そうか？ もう体は大丈夫なのか？」

「もう平氣ですか、ヒツ、お願ひですから出て行つてください」

私は立ち上がりつて妹の部屋を去つた、まだ彼女の体は震えていた。もしかしたら修一氏と彼女の間に何か有つたのではと思ったが、先ほどの様子からそのようなことは見受けられなかつた。たぶんその考えは違つものだ。

しかし、考えた所で妹の気持ちなど分かる筈もなく、ただ私は襖一枚隔てた彼女の部屋の前で妹が涙を流しているのをビュウすることも出来ずに立ちすくんでいた。

朝子が涙を流しているかも知れないと言つ考へは、いつの間にか確信へと変つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161o/>

三千京の桜

2011年1月10日15時10分発行